

刺青奉行 (十三卷)

帝キネ時代映畫

原作脚色者 上島量

監督者 渡邊新太郎

撮影者 三木茂

主演者 市川百々之助

紹介 第三百二十號

「花春遠山櫻」以來既に知られ過ぎたテーマであるが、作者は白齒のお六の點出と、そのミステリドラマ風の技巧とで舊套を脱しやうと試みて居る。時代畫が存在する限り此の種のテーマ此の種の技巧さは繰返され、繰返されても所詮仕方ないことであり、民衆も其れを別に怪しみもせず却つて拍手を忘れないであらう。随つて作者は監督はカメラは云爲するよりも興味が如何に力調されてあるかを點檢するべき作品だ。其の點此の作品は尙一息の弛緩性が残つてゐる。數多い事件の轉廻も少し壓塞し整理してほしく思つた。人物は説明に過ぎず生彩がなかつたのも其の一因である。主演者は大いにつまめてゐるが、所詮物語の主人ではないのも當然で、所謂「本格」の言葉が「舊骸」と背合せである如く總てを認容しなければならぬ。カメラの視角に於て二三特筆すべきものを發見した（寫真版紹介）

水町 青磁

興行價値——稍々長尺の嫌ひがあるが、キャストとテーマとの融合さに於て充分吸取力を持つてゐる。（五月一日 大阪芦邊劇場 神戸相生座）